

私は医師 4 年目で、東京にある国立国際医療研究センター病院に所属している総合診療科医です。「総合診療専門医」は、世界でもトップレベルのスピードで高齢化が進む日本において、ここ 10 年をかけ、国が誕生させた専門医制度です。各科の専門性が高まり細分化されていく現代の医療構造の中で、特定の臓器や疾患に限定せず、多角的に診療を行う部門として、少しずつその必要性が提唱されてきました。なぜなら、健康の問題は加齢に伴い一つ一つの臓器の衰えが複雑に反映し合った形で現れ、その問題に包括的に取り組む必要性があるからです。また総合診療科の先に、家庭医療専門医の道があります。患者さん一人ひとりが理想と考える健康とは何かを迫及し、その実現のお手伝いがしたいと総合診療科・家庭医療専門医になる道を選びました。研修プログラムには地域医療研修が必須で、津久見中央病院にご縁があり、昨年 11 月から当病院で勤務させていただくことになりました。赴任して間もなく、新型コロナウイルス流行の第 8 波により、病院は感染者への対応に追われる状況になりました。緊急時、個々の事情はともすると軽視されがちですが、当病院では各職種のメディカルスタッフが一丸となり、チーム医療で可能な限り患者さん、ご家族のためにできるベストな選択を探り奮闘している様子を目の当たりにしました。定期的に多くの勉強会・研修会・検討会が開かれていることも印象的でした。多職種が参加し、意見交換の場があることは、情報を共有化し、課題解決とよりよい診療体制のために不可欠だと強く感じました。病院外の活動では、訪問診療に出向く医師会の先生に同行させていただき、東京の病院では経験できなかった訪問診療を体験させていただきました。可能な検査や医療の選択肢が限られる訪問診療という状況の中で、なぜ患者さんや患者さんを支えるご家族が訪問診療を望んだかがわかってきました。自分らしい生き方や過ごし方をしたいと選んだ、住み慣れた「家」という場所には、その状況を超えるやすらぎ、価値があることを体で感じる事ができたからです。病院に戻ると、外来での光景が思い起こされます。地域に一つしかない総合病院ゆえの長い待ち時間ですが、隣り合わせた知らない人同士でも、お互いを思いやる様子がありました。都会にはない光景です。その患者さん方に、外来の看護師さんがこころやすく声をかけます。そこには安心、安堵する患者さんの姿がありました。看護師さんは、患者さんの社会的背景や家族の背景を本当によく知っています。それを踏まえた包括的なケアをされていると感じました。知らない土地に住み、働くことには不安がありました。しかし一緒に働く先生方、また各部署で働く皆さまのお心遣い、時には患者さんやそのご家族からの温かいお声かけをいただき、それらに支えられ 4 か月という短い期間でしたが、津久見市民の皆様のために働かせていただくことができました。皆さまに心より感謝しております。3 月からは長崎県五島列島にある上五島病院でへき地医療の研修、7 月には再び国立国際医療研究センター病院での勤務になります。地域で唯一の総合病院として、医療体制の核を担う病院で勤務させていただいたことは、医師としての人生を歩み始めたばかりの私にとって、大変貴重な学びとなりました。津久見中央病院での経験を生かして精進していきたいと思っております。この場をお借りし、関わってくださったすべての方に御礼を申し上げます。